

## 洞爺湖有珠山地域現地視察報告

参加者：伊藤和明委員、中田節也委員、事務局 原 英俊

案内者：洞爺湖周辺エコミュージアム推進協議会山中会長（壮警町町長）、ジオパーク科学検討委員会岡田委員長（北海道大学名誉教授）、エコミュージアム友の会三松会長（三松正夫記念館館長）、事務局木村・高橋ほか

9月30日

視察に先立ち、そうべつ情報館 i (アイ)にて洞爺湖周辺四首長からあいさつを受けた（壮警町・洞爺湖町・伊達市・豊浦町）。山中会長は、これまで洞爺湖周辺では国際火山シンポジウム・G8 洞爺湖サミットを始めとし、行政・民間が一体となった地域間連携活動を行ってきた。変動する大地と人間との共生をテーマに、ジオパークがこれまでの活動を次世代に引き継ぐ貴重な機会であると述べた。洞爺湖町吉田副町長は、洞爺湖サミットの知名度を活かし、エコミュージアムとして大自然を紹介していくと述べ、全国エコツーリズム大会やフットパス構想、さらに外国人の受け入れ実績などをアピールした。伊達市菊谷市長は、2000年噴火以降、消防防災センターの整備、遺跡及び文化財の整理、人類学会開催などの取り組みを挙げ、各自治体がそれぞれ特徴を持ってジオパークに取り組んでいることを述べた。豊浦町工藤町長は、火山の地質・地形の恵みとして特産物の紹介、小幌洞穴遺跡の発掘を伝えた。山中会長からは、壮警町の取り組みとして、民間講座の開設・ハザードマップの作成・防災拠点の構築・エコミュージアム友の会の設立など、行政・大学・民間が一体となった活動をアピールした。岡田委員長は、ジオパーク構想が、G8 後の主要課題として取り上げ、洞爺湖有珠地域が島弧型火山の典型例としてアピールしていくことを述べた。またこれまでの活動・防災を世界へアピールすると共に、次の噴火にどう向き合うのか考えていかなければならないと述べた。三松会長は、三松正夫氏によるジオパーク運動の先駆けを紹介した。

このあと岡田委員長・三松会長・山中会長の案内により、有珠山ロープウェイを使い、昭和祈山を有珠山側から、また有珠山火口原展望台から火口を視察した。さらに三松正夫記念館を見学し、1977年噴火火山遺構公園を視察した。共同通信・朝日新聞・読売新聞・毎日新聞・北海道新聞・日本建設新聞の各社が取材に訪れた。

10月1日

有珠外輪山散策路（災害復旧道路）を利用し、南外輪山と大火口原展望台から火口の見学、外輪山付近から流れ山地形の観察を行った。善光寺が被災から免れてきた地形的特等の説明があった。フットパス構想に係わり、ポイント標識が建てられていたが、矢印の向きなど、まだ整備不足との指摘があった。その後、雨のため予定を変更し車で北外輪まで移動し、1977年噴火の第4火口と北へせり出した地形を観察した。また2000年噴火の金比羅山火口、西山山麓火口群の隆起地形を見学した。これらの保全方法やガイド方法及び案内看板については、まだ課題として残っている。洞爺湖ビジターセンター佐々木氏の案内で、ビジターセンターと砂防公園を見学した。その後、西山火口・とうやこ幼稚園をショートストップで見学した。豊浦町へ移動し昼食をとった。昼食には豊浦町工藤町長、豊浦町関係者、NPO 法人環境防災総合政策研究機構（CeMI）関係者も同席した。昼食後、伊達市消防防災センターへ移動した。センター見学のあと、講評の時間が取られた。委員のコメントは以下の通りである。

伊藤委員：洞爺湖有珠地域は、火山を中心にして総合学習と人との共生を問われる地域で、ジオツー

リズムの普及・啓発には適当な地域である。また次の噴火に対する防災とともに、観光との両立が必要である。自治体の連携に温度差が昔からあったが、徐々に埋まってきている印象がある。説明版・案内板の修正がまだまだ必要である。GGN へ申請することになれば、来年の夏には、ユネスコから視察が来る可能性がある。直せるところは早急に直した方が良い。

中田委員：岡田委員長と三松会長の説明で、有珠山のイメージが変わり、そのインパクトはとても高い。二人が同席しない場で観光客にどうやってそれらを上手く解説できるかが課題であり、火山マイスターを初めとした次世代への伝承が必要である。案内板の整備はすぐにでも考えて欲しい。各ジオサイトに訪れた際、コアセンターへの案内や各サイトの位置づけが現在のままではわかりづらい。申請書の出来が、GGN に通過するか否かのポイントとなるが、まだ不備が多い。申請書には、生物のことも多く書かれているが、実際の案内はどうなっているか。洞爺湖がカルデラで、それを作った火砕流が平坦な台地を作ったこと、その後には有珠山ができたことなどの解説が不十分で必要である。

以下、委員・事務局と推進協議会のやりとり(委員会側:委、推進協議会側:協)。

委:住民はどの程度関心を持っているのか。

協:正直まだ大きな関心を持つレベルまでには達していない。観光・防災、エコ友の会などを通じて徐々に意識を高めていく。

協:海外と比較すると、自然教育を前面に押し出す国策が全くない。ジオパーク委員会でも一緒に汗をかいて、サポートをしていって欲しい。

委:あまり防災面だけを主張しすぎると、GGN から毛嫌いされる恐れがある。自然環境の変遷でも一本柱を立てておけば効果があるのではないか。

協:規制区域が結構ある。オープンなジオサイトの方が望ましいか？

委:特別に許されたツアー、情報開示があれば大丈夫である。

委:怪我をすると、どうしても自治体の責任になる。オウンリスクで考えていきたい。

協:雲仙ではどうか。

委:立ち入れない区域はあるが、特別なツアーがある。

講評のあと、北黄金塚公園へ移動し、縄文時代の貝塚を視察し、縄文文化とアイヌ文化の類似性について、伊達市噴火湾文化研究所大島所長より説明を受けた。NHK とさっぽろ TV 放送(日本 TV 系)のテレビ取材、共同通信・北海道新聞・室蘭民報の取材があった。

その他。

- ・ 英語・中国語・韓国語・台湾語のパンフレットが整備されている。
- ・ サミット後、欧米系の旅行者が増えた。
- ・ マスコミの関心は、現地視察のポイントにあった。
- ・ 壮瞥町では防災・減災をアピールし、職員も雇用する。
- ・ 有珠善光寺など山体崩壊、津波、火砕流被害などで貴重サイトがあるが、まだ整備されていない。
- ・ 豊浦町などジオパークでの位置づけに不十分さがある。
- ・ 推進母体が任意団体のため案内板設置の申請ができないという問題がある。

以上

## 糸魚川地域現地視察報告

日程：9月30日（火）～10月1日（水）

参加者：加藤碩一委員、鹿野久男委員、事務局 中澤 努（記録）

案内者：糸魚川市 米田 徹 市長、フォッサマグナミュージアム 竹之内 耕 学芸員、総務企画部 本間政一 部長、企画財政課 織田義夫 課長、ジオパーク推進室 岩崎良之 室長、同 小竹一康 主任主査、フォッサマグナミュージアム 村井 康 館長、フォッサマグナミュージアム友の会 久保 雄 会長

米田市長説明（糸魚川市役所応接室）

ジオパークは自然だけでなく人があって成功するものと考えている。それが地域振興にもつながるだろう。一方、糸魚川では保全と開発のバランスをうまくとりながらジオパーク活動を進めたい。説明看板を設置するなどの整備は必要。しかし、過剰な整備は避け、自然のままの良さというのも理解してもらう必要がある。糸魚川で新しいモデルをつくっていききたい。

9月30日（火）

コース：青海自然史博物館 → 親不知海岸 → フォッサマグナミュージアム

青海自然史博物館では、盗掘事件をきっかけにヒスイ巨岩を移設した経緯、奴奈川姫伝説とヒスイ・奴奈川石を絡めた展示、青海石灰岩の地質と資源としての重要性、梶海新道の地質の多様性などについて説明があった。委員からは、文化・伝説を絡めてのジオの説明がとてもよい、看板等の説明は少し難しい、博物館には生物の進化と地史をうまく関連づけた説明があるとよい、などの意見が挙った。親不知海岸では、露出する火山岩類の説明のほか、北アルプスが日本海に落ち込む交通の難所であり、四世代の道路が残されていること、日本海と北アルプスをつなぐ梶海新道の起点であることなどの説明があった。委員からは是非「ジオ」についての説明看板も設置してほしい旨、コメントがあった。フォッサマグナミュージアムでは、ジオパーク特別展を含む館内展示説明の後、博物館は現在4万5千人／年の入館があり、学習の場として活用されていること、温泉旅館とも連携していること、学芸員が岩石鑑定相談に応じていることなどが報告された。また、地元市民も地質にたいへん関心が高いことが強調された。

ミュージアムでは、ツアーガイドについても話題に挙った。市側より、現在、友の会会員を中心に多数のガイド希望者がいること、そしてガイドは有料としたい旨、発言があった。有料とすることで説明に責任をもたすことができるとのことである。これについては委員らも同意し、最初に無料ガイドを実施すると有料ガイドが入りにくくなる、サービスは受益者負担がよい、などの意見が出された。また委員より、ガイドは正しい知識を分かりやすく説明する必要があり、常に最新の知識を得ておく必要があること、そして教育・人材育成が重要であるとのコメントがあった。

10月1日（水）

コース：柵口地すべり → 海谷溪谷 → フォッサマグナパーク → 小滝ヒスイ峡・高浪の池

柵口では、地すべりと集落・棚田の関係について説明があった。委員からは、人と地質の共生をテーマとしたとても良い素材であるとの旨、コメントがあった。また、海谷溪谷では、展望台より火山岩類からなる地質の説明を受けるとともに、海谷上流は堰堤がない自然のままの貴重な河川であることが紹

介された。糸魚川-静岡構造線の断層露頭が観察できるフォッサマグナパークでは、遊歩道沿いの看板説明を見ながら地質を観察すると同時に、崩れやすい断層露頭保護の苦勞について説明があった。委員からは、条件の良いときの写真を使用して解説するとよいとの意見が出された。また、市側から、フォッサマグナパークを始めとする各サイトで、現在、説明看板を更新中であり、英語併記とする旨、報告があった。ヒスイ峡では、石灰岩壁の絶景とヒスイ原石が紹介され、高浪の池では、地すべりや小滝炭田の解説、そしてヒスイ峡・高浪の池地域にて観光バスツアーが設定されている等の説明があった。

全体講評（於 市役所応接室）では委員より以下のコメントがあった。

- ・街中や各サイトで、ジオパークのポスターやのぼりがあちこちに見受けられたのがとても印象的であった。地元の期待と関心の高さがとても良く理解できた。
- ・糸魚川は、市の職員に、地域の地質を熟知した専門家（学芸員）がいる。今後、ジオパークの活動を展開する上では極めて心強い。
- ・地質遺産は豊富で素材は揃っている。整備もかなり進んでおり、看板等の解説は正確である。
- ・看板等の解説の内容は中学生以下には少し難しい。レベルに応じた説明書やツアーがあるとよい。
- ・奴奈川姫や塩の道など、地域の文化とジオを絡ませた説明はとてもよい。
- ・地域特有の石を使って、石の解説入りの文鎮を販売するなど、ジオパークをきっかけにジオに関する付加価値のあるものを販売・提供してはどうか。
- ・世界ジオパークに認定された場合、外国人客が多く訪れることが予想されるが、糸魚川地域在住の外国人のネットワークを利用した、携帯電話を使用しての通訳サービスなどを検討してはどうか。
- ・糸魚川ジオパークのなかの各サイトについてはそれぞれを「ジオパーク」とせず、混乱をさける意味でも「ジオサイト」「ジオスポット」など、別の言葉を使用すべきだろう。
- ・各サイトははっきりとしたテーマをもって完結させる。そしてサイトをネットワークさせてジオパークとするのがよいだろう。
- ・博物館をジオパークのインフォメーションセンターとして位置づけ、駅から、あるいは高速道路から各サイトに至る全体の空間計画を、利用する人の立場にたって考えることが重要であろう。
- ・遊び感覚で楽しく学べると良い。
- ・将来的には地質に関する研修の実施も是非検討してほしい。JICA 研修や高校生サイエンスキャンプ、ティーチャーズサイエンスキャンプなどが考えられる。地元市民が参加できるものもあるとよい。ガイド等の人材育成につながる。
- ・世界ジオパークへは戦略を考えて取り組む必要があるだろう。糸魚川の地質の多様性は極めて高いが、世界ジオパークとして世界に売り込む際には、糸魚川は一言で何が売りになるかを考える必要があるだろう。

以上

## 山陰海岸地域現地視察報告

**参加者**：尾池和夫委員長、高木秀雄委員、加藤碩一委員、事務局 渡辺真人

**案内者**：放送大学鳥取学習センター西田所長、鳥取地学会星見副会長、神戸女子大学波田学長、新温泉町谷本ジオパーク調査専門員、北但層群化石研究会三木代表、鳥取県平井知事、関連市町の首長

**10月5日**（鳥取大学乾燥地研究センター、鳥取砂丘、浦富海岸、山陰海岸学習館、新温泉町マリナーポーチ）

鳥取大学乾燥地研究センターでは、鳥取砂丘でこれまで進めてきた緑化と砂丘の保護のどちらを優先するか、またセンターが海外で進めている緑化と沙漠の文化の保護の関係などについて議論された。鳥取砂丘の古砂丘と新砂丘が見える露頭の前では、日本海と山陰の気候、河川による砂の供給、冬の季節風と砂の移動などストーリーを組み立て、砂丘の形成過程をもっとわかりやすくアピールすべきとの指摘があった。鳥取砂丘では砂丘の保全に関する条例（落書き防止など）に関する説明があった。花崗岩の浸食地形が見える浦富海岸では、案内板の整備の必要性が議論された。山陰海岸学習館、新温泉町マリナーポーチでは、展示でジオパークのストーリーをわかりやすく示すべきこと、内容を最新の知識に合わせる必要があることが指摘された。山陰海岸学習館では児童向けの観察会などを行っているとのことである。夕食の際には、各地のジオパークの漫画シリーズ、ジオパークを見て回るためのフリーパスなどのアイデアが議論された。

**10月6日**（香住下浜海岸、遊覧船による香住海岸の見学、今小浦海岸、城崎温泉、玄武洞、郷村断層、かぶと山）

下浜海岸の天然記念物「漣痕」を観察し、委員の間では「流痕」であるとの結論となった。近くの足跡化石の露頭では、足跡をつけた動物の絵があると良いとのアドバイスがあった。香住海岸の遊覧船で様々な火山岩、地層とその浸食地形が観察できる。しかし、インディアン岩、メガネ岩と言った名前と柱状節理の発達した XX 層の玄武岩、と言った説明では、それぞれのサイトの位置付け（時代、地史における意味など）がわかりにくいとの意見が出た。玄武洞は案内板など良く整備されている。玄武洞ミュージアムは、個人が設立したものであるが、立派な標本が多数あり、展示を工夫できれば良いものになるだろう。郷村断層は案内板が不十分であり、見に来た人には断層がどうなっているのかわかりにくく、改善が必要である。かぶと山では地元の方がガイドしてくれたが、内容は向上の余地が大きい。またガイドマップにある久見浜湾の成因は明らかにおかしい。

### 城崎文芸館における意見交換会

協議会会長中貝氏：同じことをやったら都会が勝つ。地域の資源を生かして独自のことをやりたい。その一つがジオパークである。日本海とその生成史に関わるジオ資源を生かして広域連携に取り組みたい。各地で独自の取り組みを行うと日本国内に多様性が生まれる。

尾池委員長：多様性は 21 世紀の重要なキーワードである。山陰海岸の個性として、日本海とそれに伴う多雨多雪がある。中緯度に内海があって、湿潤な気候がある場所は世界で他にない。小さくとも世界にないものをアピールして欲しい。多雨と砂丘の関係をアピールしてはどうか。ジオパークでは行政界ではなく地学的なつながりを重要にして欲しい。

加藤委員：広域連携を成功させるために委員会としても協力したい。基本はジオであるので、訪問者がもう少しきちんと理解ができるよう工夫して欲しい。例えば、鳥取砂丘で古砂丘の話があったが、古砂丘とは何か案内板と解説ではわからなかった。海岸地形は素晴らしいが、ジオとして理解するためにはまだガイドブックや説明の工夫が必要だ。また、ジオパーク内に目的別の、例えば地形、日本海の拡大、化石といった具体的なコースを設定する必要がある。

高木委員：GGN へ通すための議論をするという立場で来ている。地域を今から変更するのは難しいとは思いますが、天橋立と生野銀山は良いジオサイトであり加えられないだろうか。日本海の拡大を具体的に理解できる説明が欲しい。もう一つのテーマは地形と活断層であろう。また、城崎の災害復興は目玉になるはずだ。これらのテーマ別にジオサイトを整理すべきである。

渡辺：ジオサイトをテーマ別に整理し、さらに優先度をつけて今後の整備とコース作りを行ってはどうか。

中貝：研究者に協力を仰ぐ際に、研究者側にメリットがないと難しい。

加藤：地方地質史の本を現在編集している。その著者に協力を頼んではどうか。本を書くために調査する必要があるはずだ。

尾池：まず全体の地史のストーリーの中にそれぞれのサイトを位置付けなくてはいけない。次に人間の歴史の中で日本海と山陰海岸を位置付けて説明する。災害もここに入る。このような作業をするためには、学者のネットワークを作る必要がある。まず website に関連する研究者、論文などのリンク集をつくってはどうか。そうすると関係者から意見がもらえるようになるのではないか。

### 帰路における議論

協議会学術顧問の西田氏によれば、地元頼れる元気な地質学者がいなかったためジオパークのストーリー作りに苦労しているとのことである。関連学会と周辺の大学で支援体制を工夫する必要がある、という宿題が残った。

以上

## 四国室戸地域現地視察報告

**参加者：**尾池和夫委員長、中川和之委員、事務局 渡辺真人

**案内者：**海洋研究開発機構高知コア研究所東所長、高知大学吉倉副学長、佐川地質館溝渕学芸員、植田県議、吉良川町町並み保存会多田氏、室戸市観光協会島田会長ほか

10月7日(海洋研究開発機構高知コアセンター、吉良メッセ室戸クジラ資料館、吉良川町の町並み、行当岬岩礁、国立青少年自然の家)

高知コアセンターでは、「ちきゅう」で採取した南海トラフのコアを、何らかの形でジオパークで活用できないかとの議論があった。コアは将来の研究に備え保存する必要があるため現状では難しいが、検討したいとのことだった。ジオパークへの入口となる空港にジオパークに関する展示を行い、その展示にセンター側で協力してはどうかと提案した。「ちきゅう」が掘り下げる深さを飛行機の高度でイメージできるので、そのサイズを実感できる。海岸で観察できるジオサイトと、その形成過程である地殻内のコアとをつなげてみるができるのはユニークであるとも指摘した。

吉良メッセ鯨資料館では、捕鯨の文化を外国からの訪問者にどう伝えるかと議論になった。備長炭で栄えた吉良川の町並みと、台風に対応した家の造りを地元のボランティアガイドの方々が案内で見学した。ジオ的な説明を今後取り入れたいとのことである。行当岬では5000万年前の海溝で堆積した乱泥流堆積物が観察できる。まだ案内板等の整備はなく、案内板でQRコードを用いた携帯電話によるガイドを行ってはその提案を行った。国立青少年自然の家の展望台からは海岸段丘地形がきれいに観察でき、ぜひ詳しいパンフレットが必要である。

### 国立青少年の家における説明と意見交換

龍河洞、横倉自然の森博物館、佐川地質館の紹介が行われ、室戸、四国ジオパーク構想に関する説明があった。委員会側は、四国運輸局の補助金獲得の都合による「四国は一つ」が先にあるのはよくない、ジオを基本に範囲を考えていくべきである、との意見を述べた。

10月8日(最御岬寺、室戸岬展望台、室戸海洋深層水アクアファーム、室戸岬乱礁遊歩道、室戸市役所、芸西村西分漁港)

第二十四番最御岬寺境内を、元住職の観光協会長島田市の案内で見学した。「ジオ遍路」の可能性が議論された。展望台では、室戸岬の東岸と西岸の地形の違いがよくわかり、説明板・ガイドマップがあれば良いジオサイトである。深層水を採取しているアクアファームを訪れ、付加体ケーキを試食した。活断層に関連した地形と深層水採取地点との関係をもう少し詳しく説明するとよい。室戸岬乱礁では、はんれい岩と付加体の砂泥互層が観察され、海面よりも高いところにある海食洞、ノッチなどの隆起地形、隆起史の証拠となるヤッコカンザシ化石など、大地の動きを物語る多くの見どころがある。ガイドマップが作成されているが、日本列島の地史の中での付加体の地層とはんれい岩の位置付け、隆起地形が物語る現在のテクトニクスなど、素材が語る多くのストーリーが十分表現されておらず、今後案内板の整備とともに改善が必要である。最後に当初のジオパーク構想に含まれていなかった芸西村西分漁港に寄り、メランジェを観察した。ここを含めて、室戸市より西側の海岸にも見どころはあり、室戸岬を中心とするジオパークの範囲をどうするかさらに検討が必要である。

### 意見交換会(室戸市役所)

室戸市長（協議会会長）：室戸市では人口減が続き、総生産額も減少している。四国霊場が3ヶ所あり、海洋深層水に力を入れ、健康と観光で町を元気にしたい。今年1月に四国運輸局の調査でユネスコの人を呼び、以来室戸はジオパークに取り組んでいる。ジオパークに関する職員研修を5月に、市民対象の勉強会を7月に、9月に平・岡村氏による講演会と野外見学会を行った。今後も室戸の地質を学習・研究・地域振興に生かしたい。

尾池委員長：GGNに初めて参加するために、申請した各地の調査を行い、どこをGGNに持って行くのが一番いいか考える。GGNだけでなく日本ジオパークネットワーク（JGN）を立ち上げる。GGN希望の5地域もJGN候補でもある。GGN、JGN審査のために今後も申請書の見直しをお願いするのでご協力願いたい。

一番気になるのは名前である。皆さんが考えておられるのは、四万十帯を中心としたジオパーク、広げて西南日本外帯までが対象に見える。それと南海地震・津波を中心とした地球物理学を合わせて組み立てたいと思われているのではないか。それと「四国ジオパーク」と言う名前が一致しない。世界の学者のネットワークを作って、知恵を集めて地元で生かしていただきたい。室戸の大地には素晴らしい素質がある。これを生かしてジオパークを実現するために委員会として支援したいので、われわれをお使いいただきたい。

中川委員：地震学会普及行事委員会委員として、地震火山こどもサマースクールという、地元の地震・火山について小中校生に再認識してもらう試みを行っている。子供版ジオツーリズムと言えるサマースクールで、室戸をどう使えるかと考えてみながら見学した。まず地元の子供たちに、室戸の秘密や謎を知ってもらいたい。1人で見に来る人にもわかってもらえるよう案内板は大事だが、メンテナンスに費用がかからないよう、例えばQRコードを利用してはどうか。30年以内に起こる南海地震には、西日本の広い範囲で対応が必要で、南海地震のメッカとして多くの人に来てもらって南海地震について知ってもらうようにして欲しい。

渡辺：素晴らしいものがあるので、後は使い方である。吉良川を案内していただいて、地元の人から地元の話聞くのは素晴らしいと思った。地元の人が実感を持ってジオを語れるようになると良いと思う。そのために行政の支援が頂ければと思うし、私たちも支援したい。

GUPI 川崎氏：外国語対応をして世界とつながりたい。英語のパンフは作ったが、ハングルも作りたい。お金があればいろいろできるが、地元の力で持続可能な形でやりたい。それぞれが自分のことをし、その力が集まって持続可能な地域の発展につながる。

植田県議：看板をどう作るか。景観を乱さないようにしたい。

尾池：訪問者が知りたいことが書いてある看板は邪魔にならない。ナントカ岩（いわ）ではなく、最低限科学的に正しい岩石名などのキーワードは必要。ジオパークは少々手を加えても伝える、と言う考え方。コーディネートをうまくして、スマートにやって欲しい。

室戸高校校長：室戸は第一次産業が基幹なので、生物中心の理科教育を考えてきた。今後は小中高の教養としての地学を生物とともに重視し、立派な市民を育てたい。看板がなくとも市民が当たり前前に説明できるようにしたい。室戸高校は必ず地学を勉強して卒業する、市民として訪問者を迎えるには地学が必要だ、という状況を作りたい。

吉倉：ぜひ地元の人材を養成したい。高校のカリキュラムの中に、地学、あるいは関連分野を含んだジオパーク学を必修にと提案した。高知大学の教員が出前事業を行うこともできる。

校長：学校設定科目として郷土史研究と深層水研究をやっている。地学系の科目を学校設定科目にすることもできる。市の協力もお願いしたい。



中川：文科省に防災教育関係のプログラムがある。使えるかも知れない。

吉倉：ジオパークについて高校で学んだ人に何らかの称号を与えては。

GUPI 永野：高知あるいは四国で世界水準のガイドをどう育てるか。一定水準をクリアしたら上級・中級と言ったクラスを作れないかなど、資格やモデルを考えている。

川崎：運輸局の予算をもらったこともありプレッシャーを感じていたが、それぞれができることをやっていくと輪が広がっていく。みんなで楽しみながらやっていければよい。

植田：ここには他の地域に真似できない大地がある。何年も前から地域の素晴らしい原石を誰が磨くのか、と言う話があったが、磨く仕組みができつつある。これから屈することなくがんばっていくので、委員の皆さんにもバックアップをお願いしたい。

県観光振興課中村：ジオパークは滞在・体験型観光として大きな可能性を持つと考えている。国交省から委託を受けて、3500万円の事業費で10月から県の事業として、広域協議会と地域協議会の立ち上げ、四国の地質遺産の調査、経済波及効果の算出、アクションプログラムの作成を行う。四国各県の地質遺産をネットワーク化して四国ジオパークとしたい。

国立青少年自然の家山之内所長：学習のメニューができれば修学旅行など長期滞在に自然の家が生かされるようになる。

吉倉・中川：自然の家の一角にジオパークを学べるコーナーがあると良い。

永野：仁淀川中流域、高知県西部でもジオパークに向けた動きがある。連携を取ってやっていきたい。

以上



## 島原半島地域現地視察報告

**参加者:** 町田 洋副委員長、伊藤和明委員、小泉武栄委員、事務局 渡辺真人

**案内者:** 長崎県教育センター寺井主任指導主事、島原市杉本ジオパーク推進室長、国交省渡部雲仙復興事務所長ほか

**9月23日野外見学**(千々石断層、清水の棚田、仁田峠、旧大野木場小学校、砂防みらい館、権現崎遺跡、災害記念館)

千々石断層の断層地形の見える休憩所では、看板の位置を目立つ場所に移動する、看板に写真と地形のスケッチを入れて説明をわかりやすくするなどが指摘された。清水の棚田は棚田百選に選ばれており、10月に棚田サミットが開かれるとのことであるが、ほかにも各地に見事な石垣の棚田があり、火山にからんだ地域の財産として大切にしてほしい、という指摘があった。。仁田峠第二展望所では平成新山、麓の扇状地と断層地形がよく見えるが、看板の改善が必要との意見があり、平成新山山麓に種をまいて植生復元をはかっていることに関して、自然のプロセスに手を出さないことが重要との指摘があった。砂防みらい館では、現在進んでいる砂防計画について規模が必要以上に大きいのではないかとの議論がなされた。砂防工事中に見つかった晩期縄文時代の権現崎遺跡を訪れたが、現在の露頭ではよく見えないので、今後再調査し、国交省の協力を得て良い露頭を残してジオサイトとすることとなった。

**島原市長による説明(主に組織について)**

3市が中心となり、23団体が参加した推進協議会が中心。各市担当課長、災害記念館、九州大学教官をメンバーとする幹事会を毎週開いている。太田名誉教授、国交省、農水省、環境省を顧問として頻りに意見交換している。知事、県の関係部局の支援も得ている。火山地質の専門家を来年4月から採用すべく選考中で、来年度には災害記念館に学芸員を1名雇用予定。

**質疑**

Q:修学旅行に来る人数は増えているか？またそのコースは？

A:18年度比で19年度は25%増えた。ただし噴火前と比べると40%減くらいである。施設の見学がメインだが、ガイド付きツアーの依頼もある。その場合千々石断層→地獄巡り→旧大野木場小学校→災害記念館と言ったコースである。

Q:手頃なガイドブックをぜひ作ってほしい。

A:記念館内を回るときの小学生向けワークシートはある。パンフレットなどは、なくなっているものもあるので、今後増刷したい。小学校4-5年生向けの副読本を作ったことがあるが、その後増刷していないので、これについても検討する。

Q:土産物売り場で売れるような地図・ガイドブックを作ってほしい。子供向け、大人向けの両方が、地域内のどこでも買えるのが大事である。

**9月24日野外見学**(武家屋敷、千本木、平成新山ネイチャーセンター、北上木場・定点、お山の情報館、雲仙地獄、早崎玄武岩、国東半島、金浜断層、小浜温泉)

砂防工事の結果、千本木周辺では火砕流の元のままの形や堆積状況を見られる場所がごくわずかになってしまった。国交省復興事務所からは、災害の経緯と砂防の理解にもつながるジオパーク

のために、地元と協議の上露頭を残したいと説明があった。平成新山ネイチャーセンターには火砕流後の植生遷移を観察できる場所がある。きちんと観察して報告をまとめて欲しいとの意見があった。43 人の方が火砕流によりなくなった北上木場・定点の向かい側には、火砕流堆積物とその堆積面、火砕流で運ばれた溶岩塊がよく見える。委員からは、砂防工事はこれ以上の規模にせず、火砕流堆積物は現状のまま保存してほしい、と言う希望があった。雲仙地獄には中国・韓国の観光客が多く、中国語・ハングルの看板があり、他の地域でもこのような看板を、との意見があった。その後雲仙火山の基盤となっている玄武岩、安山岩などを見学した。これらの露頭は小学生向けのツアーでよく使われているとのことである。小浜温泉では温泉の源泉、炭酸泉を見学した。小浜温泉では散策コースとして説明看板の整備が行われており、その一部はジオである。

## 講評

町田副委員長あいさつ：私たちは欠点を指摘してつぶす立場ではなく、支援して GGN を通し、地球科学を広く普及したいと考えている。GGN の審査に通すために何をすべきか、必要な点をアドバイスしたい。

委員・事務局と推進協議会のやりとり(委員会側：委、推進協議会側：協)

委：火山が複数候補になるかもしれないので、島原の特徴をはっきりさせて欲しい。

委：1991 年まで多くの人が知らなかった火砕流の恐ろしさを伝えることは重要。また、行政と住民との連携しての 6m のかさ上げ事業など、島原を災害復興のモデルとして PR することもできる。

委：島原は植生の多様性が大きい。噴火の後の植生変遷と合わせて目玉とできる。雨が多いこと、火山であることにより、湧水を含めて山に水が多いことも特徴。島原半島の歴史、急峻な地形に作られた棚田なども外国の人にアピールできるだろう

委：「島原大変」は将来の災害に備えるための教科書となる重要なテーマである。地元の資料を研究してアピールするべきだ。申請書にももう少し詳しく書くべき。

委：砂防事業は naturalist 的に見ると少し過大に見える。

協：ジオパークとして残した方がよいものは残してもらおうよう、国交省とも協議している。国交省側も今後の工事は状況を見て行い、またジオパークに向けての地元の意向も考慮する方向になりつつある。地元、大学、国交省で勉強会を始める。

委：ガイドブックが必要。また、立体的な図やスケッチなどわかりやすい図の入った看板が必要である。看板の説明は簡単に、詳しく考えたい人はガイドブックやパンフレットを見る、と言う二段構えの整備が必要。看板の数はまだまだ足りない。

委：中国韓国の人がたくさん訪れており、すでに中・韓国語の看板がある。今後もこの二カ国語の看板を整備するべきで、それは GGN へも良いアピールになるだろう。

協：いただいた意見を参考に整備したい。

委：申請書について。島原半島の地質に関する部分は専門家向けすぎるので書き換えが必要だ。日本全体の地形・地質に関するイントロをもう少し丁寧に書くべき。「島原大変」も記述を拡充する必要がある。また、今のジオサイトの位置図は大変見にくく、改善が必要。

以上